

博士論文（要約）

論文題目 現代中国語における数量詞の構文機能
—— 属性・様態描写の機能を中心に ——

氏 名 加 納 希 美

目次

序章 本研究の目的と構成.....	1
第1章 動量詞句とりたて構文のシンタクスと意味.....	7
1.1 問題提起	7
1.2 動量詞句とりたて構文の意味特徴.....	8
1.2.1 <一次 NP>を極端項とするとりたて.....	8
1.2.2 <一次 NP>の構成要素間に見られる意味関係.....	12
1.2.3 動量詞句とりたて構文における行為のタイプ化.....	17
1.3 動量詞句とりたて構文の成立動機.....	22
1.4 まとめ	27
第2章 “的”を伴う時量修飾構造のシンタクスと意味.....	29
2.1 問題提起	29
2.1.1 時量修飾構造	29
2.1.2 実行用法に関する第一の問題点.....	31
2.1.3 実行用法に関する第二の問題点.....	33
2.2 属性用法の意味特徴.....	34
2.2.1 実行時量と属性時量.....	34
2.2.2 属性用法の時量修飾構造に見られるメトニミー.....	35
2.2.3 実行時量と属性時量の融合.....	36
2.3 実行用法の意味特徴.....	37
2.3.1 実行用法の時量修飾構造に見られるメトニミー.....	37
2.3.2 計量対象の事態の意味特徴.....	39
2.3.2.1 一括的事態把握.....	39
2.3.2.2 タイプとしての事態把握.....	40
2.3.2.3 目的語名詞の指示特性.....	42
2.4 まとめ	44
第3章 描写性数量詞の構文機能 —空間様態描写機能を中心に—	49
3.1 問題提起	49

3.2	描写性臨時量詞の描写機能.....	52
3.3	非対格構文における描写性数量詞の働き.....	56
3.3.1	描写性数量詞による述語の非対格化.....	56
3.3.2	結果補語の共起制限に見る描写性数量詞の描写特性.....	58
3.3.3	描写性数量詞による結果状態の前景化.....	61
3.4	判断文における描写性数量詞の働き.....	63
3.4.1	判断文の構文的特徴と描写性数量詞の意味機能.....	63
3.4.2	存現文における場所名詞句との比較.....	66
3.5	まとめ.....	68
第4章	拡張二重目的語構文の成立条件.....	71
4.1	問題提起.....	71
4.2	先行研究.....	75
4.3	加害タイプの構文的特徴.....	78
4.3.1	加害行為としての意味特徴.....	78
4.3.2	動詞の特徴と構文的意味特徴との関連.....	80
4.3.3	加害タイプにおける量詞の選択制限.....	86
4.3.4	加害タイプの成立動機.....	88
4.4	被害タイプにおけるS類臨時量詞の描写機能.....	89
4.4.1	被害タイプの意味特徴と述語動詞の特徴.....	89
4.4.2	被害タイプの結果指向.....	91
4.4.3	被害タイプの成立要因.....	93
4.5	S類拡張構文の成立動機.....	94
4.6	S類拡張構文の能格性.....	96
4.7	まとめ.....	99
第5章	再帰的拡張二重目的語構文における描写性数量詞の意味機能.....	101
5.1	問題提起.....	101
5.2	先行研究.....	103
5.3	<一身 NP>と、動補構造における補語成分の意味機能.....	105
5.3.1	拡張二重目的語構文から“把”構文への変換成否.....	105

5.3.2	描写性数量詞による非対格性と使役性の付与.....	107
5.3.3	<一身 NP>の述詞性.....	109
5.3.4	“得”補語文と再帰タイプの比較.....	112
5.4	再帰タイプの結果指向性.....	115
5.4.1	談話環境における結果指向性の現れ.....	115
5.4.2	結果指向性をもたらす構造的要因.....	117
5.4.2.1	“V了+数量詞フレーズ”の意味特徴.....	117
5.4.2.2	結果様態文の構文的意味特徴.....	119
5.4.2.3	結果様態文の統語構造.....	122
5.4.3	再帰タイプにおける<一身 NP>の焦点化.....	124
5.5	再帰タイプの成立要因.....	126
5.6	まとめ.....	129
終章	本研究のまとめと課題.....	133
	<謝辞>.....	142
	参考文献.....	143

本文

博士論文本文は5年以内に出版予定。

参考文献一覧

- 古川裕 1997. 「数量詞限定名詞句の認知文法 —指示物の〈顕著性〉と名詞句の〈有標性〉—」, 『大河内康憲教授退官記念 中国語学論文集』 : 237-266 頁。東京 : 東方書店。
- 池田晋 2016. 「中国語 A A B B 型重畳形式の多量性と状態性に関する試論」, 『筑波大学外国語教育論集』 38 : 29-44 頁。
- 池上嘉彦 2000. 『「日本語論」への招待』。東京 : 講談社。
- 石村広 2011. 『中国語結果構文の研究—動詞連続構造の観点から』。東京 : 白帝社。
- 加納希美 2006. 「動量詞句とりたて構文のシンタクスと意味」, 『中国語学』 253 : 254-273 頁。
- 加納希美 2008. 「計量臨時量詞の構文機能—空間様態描写機能を中心に—」, 『中国語学』 255 : 116-136 頁。
- 加納希美 2013. 「“的”を伴う時量修飾構造のシンタクスと意味」, 『木村英樹教授還暦記念 中国語文法論叢』 : 255-275 頁。東京 : 白帝社。
- 加納希美 2016. 「拡張二重目的語構文の成立条件 —臨時量詞による結果描写との関連を中心に—」, 『中国語学』 263 : 99-117 頁。
- 木村英樹 1997. 「動詞接尾辞“了”の意味と表現機能」, 『大河内康憲教授退官記念中国語学論集』 : 157-179 頁。東京 : 東方書店。
- 木村英樹 2000. 「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」, 『中国語学』 247 : 19-39 頁。
- 木村英樹 2008. 「中国語疑問詞の意味機能——属性記述と個体記述」, 『日中言語研究と日本語教育』 Volume1-1 : 12-24 頁。東京 : 好文出版。
- 木村英樹 2012. 「ヴォイスの意味と構造」, 『中国語文法の意味とカタチ—「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究—』 : 187-213 頁。東京 : 白帝社。
- 小嶋美由紀 2009. 「拡張的二重目的語構文“玩儿他个痛快”の成立動機とメカニズム」, 『中国語学』 256 : 122-140 頁。
- 水口志乃扶 2004. 「「類別詞」とは何か」, 西満義弘・水口志乃扶 編『類別詞の対象』 : 5-22 頁。東京 : くろしお出版。

- 中右実 1982. 「英語」, 『講座日本語学 10 外国語との対照 I』 : 139-158 頁。東京 : 明治書院。
- 中川正之 1973. 「二重目的語文の直接目的語における数量限定語について」, 『中国語学』 218 : 19-22 頁。
- 西村義樹 2002. 「換喩と文法現象」, 西村義樹 編『シリーズ言語科学 2 認知言語学 I : 事象構造』 : 285-311 頁。東京 : 東京大学出版会。
- 沼田善子 2000. 「とりたて」, 金水敏・工藤真由美・沼田善子 著『 (日本語の文法 2) 時・否定と取り立て』 : 151-216 頁。東京 : 岩波書店。
- 小野秀樹 2008. 『統辞論における中国語名詞句の意味と機能』。東京 : 白帝社。
- 大河内康憲 1977. 「副助詞「モ」と副詞「也」など」, 『日本語と中国語の対照研究』 2 : 12-18 頁。日本語と中国語対照研究会。
- 大河内康憲 1981. 「连～也」, 『中国語』 10 月号 : 19 頁。
- 大河内康憲 1985. 「量詞の固体化機能」, 『中国語学』 232 : 1-13 頁。
- 大河内康憲 1967. 「複句における分句の接続関係」, 『中国語学』 176 : 1-12 頁。
(大河内康憲 1997. 『中国語の諸相』 : 86-106 頁。東京 : 白帝社 に再録)
- 大河内康憲 1979. 「オノマトペア」, 『中国語』 2 月号 : 2-4 頁。
- 奥津敬一郎 1983. 「数量詞移動再論」, 東京都立大学『人文学報』 160 : 1-24 頁。
- 定延利之 1995. 「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」, 益岡隆志・沼田善子・野田尚史 編『日本語の主題と取り立て』 : 227-260 頁。東京 : くろしお出版。
- 朱德熙 1981. 『語法講義』。北京 : 商務印書館 (杉村博文・木村英樹 訳 1995. 『文法講義 朱德熙教授の中国語文法要説』。東京 : 白帝社。)
- 杉村博文 1995. 「中国語における動詞句・形容詞句の照応形式」, 大東文化大学語学教育研究所『語学研究大会論集』 3 : 51-66 頁。
- 杉村博文 2003. 「択一対応と周遍対応および偏向指示」, 『中国語学』 250 : 50-67 頁。
- 杉村博文 2006. 「中国語授与構文のシンタクス」, 大阪外国語大学『大阪外国語大学論集』 35 : 65-96 頁。
- 矢澤真人 1985. 「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」, 学習院女子短

- 期大学『学習院女子短期大学紀要』23, 96-112 頁。
- 楊凱榮 2002. 「「も」と“也”数量強調における相違を中心に」, 生越直樹 編『(シリーズ言語科学4) 対照言語学』: 161-182 頁。東京: 東京大学出版会。
- A.A. 龙果夫 1958. 『现代汉语语法研究』。北京: 科学出版社。
- 杜道流 2007. 「计数和计量-兼论“名量词”的功能类别」, 『语言研究』第1期: 77-80 頁。
- 蒋严・潘海华 1998. 『形式语义学引论』。北京: 中国社会科学出版社。
- 李临定 1989. 「名词短语补语句析」, 『中国语文』第4期: 255-263, 299 頁。
- 李湘 2011. 「从实现机制和及物类型看汉语的借用动量词」, 『中国语文』第4期: 313-325 頁。
- 刘安春・张伯江 2004. 「篇章中的无定名词主语句及相关句式」, 『Journal of Chinese Language and Computing』 Vol.14 (No.2): 97-105 頁。
- 刘丹青 2005. 「作为典型构式句的非典型“连”字句」, 『语言教学与研究』第4期: 1-12 頁。
- 刘顺 2003. 『现代汉语名词的多视角研究』。上海: 学林出版社。
- 刘月华・潘文娉・故(韦华) 1983. 『实用现代汉语语法』。北京: 外语教学与研究出版社。
- 刘月华・潘文娉・故(韦华) 2001. 『实用现代汉语语法(增订本)』。北京: 商务印书馆。
- 陆俭明 1988. 「现代汉语中数量词的作用」, 中国语文杂志社 编『语法研究和探索(四)』: 172-186 頁。北京: 北京大学出版社。
- 吕叔湘 1944. 『中国文法要略(中卷)』。上海: 商務印書館。
- 吕文华 1995. 「略论一组含时量词语的同义格式」, 『语法研究和探索(七)』: 280-291 頁。北京: 商务印书馆。
- 马庆株 1983. 「现代汉语的双宾语结构」, 『語言學論叢』10: 166-196 頁。
- 杉村博文 1992. 「现代汉语“疑问代词+也/都……”结构的语义分析」, 『世界汉语教学』第3期: 166-172 頁。
- 邵敬敏 1996. 「动量词的语义分析及其与动词的选择关系」, 『中国语文』第2期:

- 100-109 页。
- 王力 1943.『中国现代语法』。上海：商務印書館。（王力 1955.『中国现代语法（上册）』。北京：中华书局。）
- 项开喜 1997.「汉语重动句式的功能研究」，『中国语文』第 4 期：260-267 页。
- 杨凯荣 2000.「“也”的含意与辖域」，『中国語学』247：172-187 页。
- 袁毓林 1995.「词类范畴的家族相似性」，『中国社会科学』第 1 期：154-170 页。
- 薛凤生 1994.「把字句和被字句的结构意义」，『功能主义与汉语语法』：34-57 页。
北京：北京语言学院出版社。
- 张伯江 2000.「论“把”字句的句式语义」，『语言研究』第 1 期：28-40 页。
- 张伯江 1998.「名词的指称性质对动词配价的影响」，『现代汉语配价语法研究（第二辑）』：151-162 页。北京：北京大学出版社。
- 张丽群 1999.「“一+借用量詞”と“满+名詞”－日本語との比較を兼ねて－」，『筑波応用言語研究』6：145-158 頁。
- 张丽群 2001.「试论身体部位名词作量词使用时的特征」，『中国語学』248：199-212 页。
- 趙金銘 1989.「现代汉语中“满”和“一”的不同分布及其语义特征」，『中国語』11 月号：26-29 页。東京：大修館書店。
- 周小兵 1997.「动宾组合带时量词语的句式」，北京语言学院『语言教学与研究』第 4 期：142-147 页。
- 朱德熙 1982.『语法讲义』。北京：商务印书馆。
- 朱德熙 1985.『（汉语知识丛书）语法答问』。北京：商务印书馆。
- Cheng, Lisa L.S., Huang, C.T. James, Li, Y.H. Audrey, & Tang, C.C. Jane. (1999). Hoo, Hoo, Hoo: Syntax of the Causative, Dative, and Passive Constructions in Taiwanese. *Journal of Chinese Linguistics Monograph Series 14, Contemporary Studies on the Min Dialects*. 146-203.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Kimura, Hideki.1997.「漢語被動句の意義特徴及其結構上之反映」，『Cahiers de

Linguistique - Asie Orientale』 Vol.26 No.1(1997):21-35 页。

Langacker, Ronald, W. 1987. *Foundations of cognitive grammar, Vol. I, Theoretical Prerequisites*. Stanford, California: Stanford University Press.

Li, Charles N. and Sandra A. Thompson 1981. *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley: University of California Press.

コーパス

北京大学汉语语言学研究中心コーパス (総字数 : 4.77 億字)

URL:http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp

論文の内容の要旨

論文題目 現代中国語における数量詞の構文機能

—— 属性・様態描写の機能を中心に ——

氏 名 加 納 希 美

本研究は、構文文法論の理論的枠組を用いて、現代中国語の複数の構文と、数量詞および数量表現のはたらきとの相互作用を論ずるものである。数量詞とは“三個人 [三人のひと]”における“三个”のように、数詞と量詞の結合により構成されるフレーズを指す。

中国語の数量詞は様々な独自の特徴を持ち合わせており、例えば、容器性を備える名詞は、数詞の“一”と結びつき、数量詞の形式を構成することによって“一抽屉衣服 [引き出し**いっぱい**の洋服]” “一脸汗 [顔**じゅう**汗だらけ]”のように遍満状態の領域を描写することができる。この種の描写性をもつ数量詞には一定の生産性が見られることから、構成要素となる名詞は臨時量詞の一種（本研究では「描写性臨時量詞」と呼ぶ）として、一つのカテゴリーを形成していると見做すことができる。中国語の量詞は、類型論的には、日本語の助数詞と同じく類別詞として扱われるが、この種の臨時量詞というカテゴリーは日本語の助数詞にはなく、中国語量詞の特性の一つであると言える。

先行研究では、上記のような数量詞の機能や特性のほか、数量詞が構文において担う機能（構文機能）についても多くの成果が蓄積されてきたが、本研究で取り上げるいくつかの構文に関しては、数量詞の構文機能が限定的に、もしくは概括的に論じられることはあっても、その詳細については十分な議論が尽くされているとは言えない。

本研究では第一の目的として、先行研究によって明らかにされてきた数量詞の機能や特性を踏まえ、特に、量詞のタイプごとに異なる固有の特性が、構文的意味の理解や、構文の成立条件、構成動機にどのように影響するか等の問題について、新たな知見を得ることを目指す。

また第二の目的として、複数の構文の統語的、意味的特徴を踏まえ、それぞれの構文的特徴と数量詞および数量表現の構文機能との関連に合理的な説明を与えることを目指す。

本研究ではまず序章において、中国語量詞に関する先行研究の成果を概観した上で本研究の目的と構成を述べる。

第1章では「動量詞句とりたて構文」の構文的特徴と共に、構文中に現れる数量詞の構文機能を考察する。当該構文の構造的特徴は、“一次城也没进 [一度も町へ行かなかった]”のように、動作回数単位を表す量詞（すなわち動量詞）と数詞の“一”との結合から成る数量詞がいわゆる「極端項」として動詞句の前に用いられる点にある。本章では、当該構文において、「一度；一回」を意味する数量詞が、計量対象の動作行為について「少なくとも一回は遂行されるはずの行為である」という読みをもたらし、動作行為の属性描写に携わることを明らかにする。加えて、この種の属性描写としてはたらきが発動される要因が、極端例をとりたてるといふ当該構文の意味的特徴と、数量詞の現れる連体修飾語という統語的位置との相互作用に関わるものであることを明らかにする。

第2章では、「“的”を伴う時量修飾構造」について考察する。当該構文では、“看了一部三个小时的录像 [三時間の録画を見た]”や“骑了一个小时的车，找到了李方的家 [自転車に一時間乗って李方の家を尋ねあてた]”のように、時間量を表わすことを基本機能とする数量表現、すなわち時量表現が“的”を伴う連体修飾語として用いられる。上述の二例のうち、前者は属性用法の代表

例であり、時量表現は構文中で言及する動作行為の属性の一側面としてその遂行に要する時間量を表わす。一方、後者は実行用法の代表例であり、時量表現は一回的な動作行為の完了時点において確定する継続時間を表わす。本章では両用法間のこのような意味の相違に基づき、実行用法は属性用法の統語構造と意味との結びつきを利用した拡張表現として成立するものであること、すなわち、実行用法の統語構造とは、動作行為の完了時に新規に確定される具体的な時間量を、発話者が計量対象の一回的な動作行為の属性として捉え直し、その見立てを反映する構造であることを、諸々の言語事象に基づき論証する。

第1章と第2章で扱う構文は、コトの数量を表わす数量詞および数量表現がモノを表す名詞句を修飾するという、連体修飾語と被修飾語の間に意味上のミスマッチと見受けられる関係が生じるという点で共通する。先行研究においてこの種の統語構造の特殊性に着目し、その成立動機や要因を詳細に議論した例はない。本研究では、当該構文の被修飾語の名詞句は、メトニミー表現の一種として構文中で言及する動作行為にアクセスするための参照点として機能しており、従って、動作行為の属性描写に関わる連体修飾語の数量表現と被修飾語の名詞句の関係はミスマッチの関係ではないという新たな解釈を提示する。

第3章から第5章では、描写性数量詞が用いられる複数の構文について考察する。

まず第3章では、描写性数量詞が用いられる二種類の構文を取り上げる。一つは、“张三一身都是泥 [張三は体じゅう泥だらけだ]” に代表される「判断文」の一種であり、もう一つは“白薯土豆撒了一地 [サツマイモやジャガイモが地面一面に散らばった]” に代表される「非対格移動文」である。はじめに、本章では描写性臨時量詞として借用される形式が一定の指示機能を保持することと、描写性臨時量詞の現れる判断文は、二重主語構文としての特徴をもち、当該構文の二つの主語は共に「属性記述の対象」として特徴づけられることの二点を確認する。その上で、判断文の構文的意味特徴が、一方では「事物と一体化した領域」という描写性数量詞の描写する領域の意味特徴によくなじみ、当該構文の第二の主語として数量詞を用いることを動機づけると同時に、もう一方では、描写性数量詞の指示性を引き出す要因として作用している、ということをも明らかにする。

非対格移動文については、この種の構文が、主語に立つ事物に生じた変化や結果状態を表わす構文として特徴づけられることを確認した上で、当該構文では描写性数量詞が補語の位置に現れることにより、結果状態を描写するはたらきを担うという事実を指摘する。変化後の状態を焦点化するはずの当該構文では、時に“推 [広げる]”のようにスル的事態を表わす他動詞（すなわち非対格動詞ではない動詞）が現れるが、この現象の成立については、描写性数量詞が結果状態の描写成分として作用し、述語動詞全体が非対格表現に転じることに因ると考えることにより合理的な説明が得られる。

第4章では、非三項動詞を述語に用い、身体部位を表わす形式を描写性臨時量詞として用いる拡張的二重目的語構文を取り上げ、構文の成立動機や成立条件について、数量詞の構文機能との関連から明らかにする。この種の構文は意味上“泼了他一脸酒 [彼の顔じゅうに酒をぶちまけた]”のように加害の事態を表わすタイプと、“溅了他一身水 [彼は全身ずぶ濡れになってしまった]”のように被害の事態を表わすタイプとに分けられる。この両タイプの構文は、結果状態の出現に対する意図性の有無という点で意味上の差異が見られるものの、二重目的語構文の統語構造をもち、数量詞が直接目的語の修飾語として現れて間接目的語の人物の身体上に生じる遍満状態を描写する点、更には、その遍満状態が当該構文においては何らかの事象によってもたらされた不如意な結果として解釈される点等において共通の特徴をもつ。本研究ではこうした構文的事実を指摘すると共に、当該構文に用いられる臨時量詞が身体部位を表わす形式に限られる点に着目し、加害や被害を表わすこの種の拡張構文は、共に、身体部位に強制的にもたらされた顕著な結果状態を描写しようとすることに動機づけられて、使役の事態を表わす二重目的語構文の型を利用することにより構成される表現であるとする解釈を示す。また、当該構文では非三項動詞を用いるにも関わらず、三項動詞としての統語的ふるまいが許容される。この現象については、二重目的語構文の構造的、意味的特徴と、描写性臨時量詞による描写機能との相互作用により、構文中で言及するできごとが「間接目的語の人物に、強制的に顕著な結果状態をもたらす対人的事象」として捉えられることに起因することを明らかにする。

第5章では、“扔了一地形形色色的鞋 [地面一面に色とりどりの靴が放られていた]”を代表例とする「結果様態文」と、“摔了我一身的泥 [躓いて転び、体じゅう泥まみれになった]”を代表例とする「再帰的結果様態文」を中心に取り上げる。本章では、まず両構文に現れる“数量詞+NP”に補語に類似する特徴が見られる一方で、このフレーズを補語として扱いきれない言語現象が見られることを指摘した上で、“数量詞+NP”の補語に通じるはたらきと、構文の統語構造や数量詞の描写機能との関連を考察する。

二タイプの結果様態文において、描写性数量詞フレーズが補語に通じるはたらきを持ち得る要因については、拡張二重目的語構文や動目構造を用いて、完了済みの事態の因果関係を叙述する際、それぞれの述語形式の一部が、数量詞フレーズを補語として導く“V了+数量詞(フレーズ)”と形式上しばしば類似することに加え、特に結果状態の描写が焦点化される言語環境の下では、描写性数量詞フレーズの描写性が高められることが関与的であるとする解釈を示す。

最終章では、本研究を通じて得られた新たな知見に関して、構文論、統語論および意味論に関わるより一般的な観点から論点を整理し、最後に本研究で扱いきれなかった複数の問題を今後の課題として示す。